

令和 2 年 12 月 16 日現在

機関番号：23503

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K02036

研究課題名(和文) 東アジア近代化の地域論的比較思想研究—新出の康有為自筆資料に見る21世紀的課題—

研究課題名(英文) A Study of Regional Comparative Thought on the Modernization of East Asia-Issues for the 21st Century in the Newly Published Autograph Materials of Kang Yu-wei-

研究代表者

平野 和彦 (HIRANO, KAZUHIKO)

山梨県立大学・国際政策学部・教授

研究者番号：60238376

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：康有為は中国清末の思想家、政治家である。変法運動の中心的存在として影響を与えたが、1898年の戊戌政変(百日維新)の失敗後、康有為は中国を離れて日本経由で長い海外亡命生活を送ることになる。その前後の思索をまとめた『大同書』は後世の思想家に大きな影響を与えた。本研究で扱った康有為自筆資料は、特にその海外亡命時代と中華民国になって帰国後に書かれた詩文で、先行研究との間に、多く文字の異動が見られるものや、筆写した年代が異なる資料が散見され、比較研究によって康有為の足跡をより明瞭にする研究となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で扱った康有為自筆資料はそのほとんどが草書体で、既に公刊されている他の康有為関連の先行研究文献と、今回得られた細字草書の翻刻を手掛かりに比較対照が行えたことは、特にその書き込みの中から康有為の思索の過程を看取することが出来たことで、同時代の文人や政治家との交友、長い海外亡命生活での見聞、日本との関係、儒教と西洋思想、仏教とキリスト教など、康有為の世界観と東アジアの近代化研究が同一の基軸の上にあることを確認できる欠くことのできない研究となった。

研究成果の概要(英文)：Kang Youwei was a thinker and politician at the end of the Qing dynasty in China. After the failure of the Boshu Rebellion (Hundred Days Restoration) in 1898, he left China and spent a long time in exile abroad via Japan. The "Datongshu" a collection of his thoughts before and after that time, had a great influence on later generations of thinkers. In this study, we examined the autographs written by Kang Youwei, especially the poems written during his exile and after his return to China.

研究分野：中国近現代文化思想史

キーワード：康有為 康有為の自筆資料 康有為の教育思想 アジアとキリスト教 戊戌変法 張勳復辟運動 日本郵船とアジア

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、何創時書法芸術基金会所蔵の康有為自書草書手稿の画像データを入手したことに始まる。康有為に関する先行研究は多く、本研究開始の直近では、2008年に中国広東省南海県(康有為の出身地)で開催された「康有為と改革創新學術研討会」(広東省社会科学院等主催)があり、研究代表者もそれに参加した。康有為の主要著作『新學偽經考』(1891)の今文・古文の論争をその文脈に含む書の碑学派理論『広芸舟双楫』に係る三つの書名の問題を論じたが、広東省社会科学院が蔵する康有為の詩一首(墨蹟・複印)を得て、それが、康有為の詩と文学の研究に方向性を見出そうとしていた時期とも重なり、また日本国内にも康有為自書草書手稿が存することが分かっていたことも本研究を後押しすることになった。康有為は中国近代の中国近代の政治家、思想家で、中国書道史形成にも欠かせない重要な人物である。その交友範囲は広く、日本では犬養毅などの政治家とも文人交友があったことはつとに有名である。書法作品集は多く出版されて世に出ているが、康有為の小字草書文字は非常に個性的で、その筆を細字用筆に持ち替えて詩文を書写すると、その特徴が更に際立ってその癖は翻字を難しくさせる。先行研究としては既に蔣貴麟主編『康南海先生遺著彙刊』(台湾宏業書局)、吳天任撰『康有為先生年譜』(上、下・台湾藝文印書館)、上海市文物保管委員会文献研究部編『萬木草堂詩集』(上海人民出版社)などがあり、そこで、草書読解と翻刻にあたっては必ず誤読を避けねばならず、詩文に長じ、書に長けた人物に研究協力を依頼する必要があると考えられ、分担者とも相談の結果、台湾故宮博物院などの作品解説や批評に携わる台湾在住の人物にお願いすることにした。また、自書草書手稿には、海外亡命期間が長かった康有為が現地です手写したものも多く含まれており、上記の先行研究との比較対照によって、詩文から見る康有為の人物像を明らかにし、康有為の文学、教育思想を掘り下げながら、儒教、孔子教、西欧思想を俯瞰すべく分担者と共に研究に着手した。康有為と仏教、大同書の研究については、国内の第一人者に研究協力を依頼して快諾が得られ、康有為とキリスト教、東アジアとキリスト教など東洋、西洋の比較研究は分担者を中心として協力して行った。

2. 研究の目的

これまでの康有為研究は、主に戊戌政変前後の政治活動や「春秋公羊学」、『孔子改制考』(1897)、『大同書』(1919)などその思想研究を中心に行われてきたが、亡命前後に書かれた詩文のなかに康有為の足跡を見出しつつ、時々的心境の変化や人物観、日本観、地域観、時代観、世界観などを見出す試みは一部の研究以外には特段の注意が払ってこられなかった。これは、現在上海博物館に収蔵される康有為手稿が、『萬木草堂遺稿』(上海人民出版社)として出版されて世に公になったのが1996年と比較的遅かったことは、それがもともと台湾に在住する康有為の家族によって保管されていたことなどが大きく起因するものである。康有為の詩文、特にその詩と眉批には世界各地で触れた様々な事象、事物、人物が記録されていた。これらを解読して康有為が文学に表現した世界観を明らかにし、人物「康有為」論を示すことが主たる目的となった。また、康有為を多くの人物が支えたことは、その政治主張や時代背景もさることながら、万木草堂での教学以来、康有為の教育を受けた学生たちがその人物や見識に魅了されたからにはほかならず、こうした点を紐解いて明らかに出来得るのが康有為の「詩」という文学作品であると確信した。戊戌政変失敗後、宮崎滔天の助けで当時の日本郵船「河内丸」に乗船して上海経由、香港から日本に亡命し、中華民国に入ってから同じ日本郵船の「宮崎丸」の便箋に「辛亥(1911)」の年に手写した詩が何創時書法芸術基金会の資料の中に在った。康有為は熱海、箱根と旅行をして日本滞在を楽しんだが、憂国の情はその詩の中にひしひしと表現されていた。政治的亡命ということもあるにせよ、当時の日本の政界のみならず、財界との交流や支援もあったものと推察され、この点を解明することも本研究の目的となった。

3. 研究の方法

(1)台湾で得られた康有為自筆史料の読解と先行研究との比較。先行研究は主に上記研究当初の背景に記した書籍との校合を行った。また、肉筆で書かれた康有為の小字草書は独特の癖があり、より多く実物を鑑賞し臨模を繰り返す必要があった。誤読を避けるためである。台湾中央研究院近代史研究所に別本資料が蔵されており、その大量に及ぶ精緻な電子画像データを観る機会を得て本研究資料の翻刻を進めた。

(2)康有為の教育思想、留学生支援について、万木草堂で学んだ梁啓超を代表として、多くの人材が戊戌変法運動に参加したことにはじまり、晩年に康有為が交友を持った上海の芸術家たちや学生たちが日本に留学するための援助を行ったことなどが今日的にどのような評価を得られるか、また、「大同思想」にも関わる女子教育観が如何なるものであったかの論考を進めた。

(3)康有為が生きた時代を俯瞰すべく、東アジアの近代化と西洋の関係、主にキリスト教宣教師とアジアの関係について研究を進めた。プロテスタント伝来と東アジアの近代に関わり、宣教師たちが儒教をどのように見ていたのかなどについて、宣教師文献を中心に研究を進めた。また、約翰福音書冒頭のロゴス-漢訳、日本語訳『聖書』の比較研究など、東洋と西洋の言語的、哲学的側面の位相にも論及すべく研究を進めた。

4. 研究成果

東アジアの近代化という大テーマの設定については、東アジア地域やベトナムなどに伝わる原始儒教と孔子儒教に関する認識を明らかにし、そこに接したプロテスタント宣教師がそれらをどのように理解したのか、また、伝道にあたってどのような方法をとったのかという異なる言語、

異なる哲学的背景を持つ地域の本質的問題が何であったのかを考察した。これは、康有為の『大同書』に述べられた内容にも関わる完全に自由平等な世界の到来とも共通項を持ち、それは当然ながら康有為の教育思想、女子教育の理念にも表れてくるものであり、本研究の教育思想のうち、康有為の女子教育思想がどのようなものであったかが明らかにされた。康有為遺稿『列国遊記』（上海人民出版社・1995）の冒頭 22 頁に掲載された手写筆跡の最初に、戊戌維新運動（1898）失敗の翌年 1899 年、日本経由で加拿大（カナダ）に亡命した康有為が絵葉書に書いた筆跡が残されている。絵葉書の表は「加拿大聖老斯河千島群島」（THOUSAND ISLAND・サウザンドアイランド）の写真、裏に「光緒二十五年己亥三月遊」の記録がある。何創時書法芸術基金会所蔵の康有為自書真蹟は、先行研究との対照で詩文そのものの読解は果たせたが、眉批解釈にあたっては、この資料のように明瞭に年譜と排列対照できるものとそうでないものが存在した。康有為遺稿『列国遊記』の 1908 年に書かれた「希臘遊記」（ギリシャ遊記）も非常に興味深く、また、埃及（エジプト）の金字塔（ピラミッド）を近景、遠景で見たことが知れる『列国遊記』書籍の表紙は駱駝も写り込んだ写真で、これに、「戊申二月登頂題詩（1908）」とあることから康有為五十一歳ピラミッドに登って詠まれた詩であることもわかる。吳天任撰『康有為先生年譜』には、「二月、遊埃及。先生以埃及建國在五千年前有金字塔、古王陵、石獸諸古跡、爲全球最古文物文明之地、故往遊焉。」とあり、多くはないものの康有為がエジプト外遊で得た世界観の一つである。研究開始の一年目、青島の康有為故居記念館を訪問し第一回目の討論会を行ったが、その展示の中にエジプトで購入したと見られるものが見られた。また、当該記念館の収藏品目録にも、エジプト製の絨毯と思われる一連の収藏品目録が見られたが、収蔵庫内は未整理のため閲覧ができないとのことであった。このように、上記先行研究や『康有為自編年譜』等にも記録されていないケースが多々あり、詩文が書かれた背景を深く読み込むことで、本研究成果報告を更に推し進めることが出来る。今後も、史料価値の高いものを得るべく研究を継続したいと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 11件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 馬燕	4. 巻 第15号
2. 論文標題 康有為的留学教育思想	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『愛知文教大学比較文化研究』	6. 最初と最後の頁 11. 12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 中村聡	4. 巻 第67号
2. 論文標題 原始儒教・孔子儒教・朱子学 公理論的アプローチ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『新しい漢字漢文教育』（全国漢文教育学会）	6. 最初と最後の頁 19. 29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村聡	4. 巻 第120号
2. 論文標題 約翰福音書冒頭のロゴスをめぐって 漢訳、日本語訳『聖書』の翻訳とその思想的背景	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『東洋研究』（大東文化大学東洋研究所）	6. 最初と最後の頁 1. 25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村聡	4. 巻 No. 832
2. 論文標題 見方を変えれば、新しい智が見つかる	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『全人』（玉川学園）	6. 最初と最後の頁 16. 19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 馬燕	4. 巻 59
2. 論文標題 康有為と大隈重信	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『中国古典研究』	6. 最初と最後の頁 pp.14-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 馬燕	4. 巻 20
2. 論文標題 康有為教育思想在現代教育中的伝承	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『愛知教育大学論叢』	6. 最初と最後の頁 pp.85-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 中村聡	4. 巻 205
2. 論文標題 宣教師たちは儒教をどう捉えたのか	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『東洋研究』(大東文化大学東洋研究所)	6. 最初と最後の頁 pp.25-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 馬燕	4. 巻 第58号
2. 論文標題 康有為と宮崎滔天	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『中国古典研究』	6. 最初と最後の頁 p46-p57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 馬燕	4. 巻 第19巻
2. 論文標題 清国留学生の日本での活動に関する研究	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『愛知文教大学論叢』	6. 最初と最後の頁 p43 - p57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 馬燕	4. 巻 第57巻
2. 論文標題 康有為と中国人日本留学 史料調査を通じて	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 中国古典学会『中国古典研究』	6. 最初と最後の頁 p.70 -p.79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村聡	4. 巻 第108巻4号
2. 論文標題 プロテスタント宣教師文献とアジアの近代化	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『三田学会雑誌』(慶應義塾経済学会)	6. 最初と最後の頁 p.27-p.36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村聡(共著)	4. 巻 第21号
2. 論文標題 江戸後期より明治初期に至る科学の進歩と科学教育の研究	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『玉川大学学術研究所紀要』	6. 最初と最後の頁 p.19-p.28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中村聡
2. 発表標題 プロテスタント伝来と東アジアの近代
3. 学会等名 國學院久我山高等学校教員研修会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中村聡
2. 発表標題 言葉と宗教
3. 学会等名 日本基督教団大塚平安教会（招待講演）
4. 発表年 2017年～2018年

1. 発表者名 平野和彦
2. 発表標題 康有為手書墨跡を読むー詩稿の背景をめぐって
3. 学会等名 平成28年度無窮会東洋文化談話会発表大会（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 中村聡
2. 発表標題 プロテスタント宣教師著作文献と東アジアの近代
3. 学会等名 中華圏プロテスタント研究会 - 明治学院大学キリスト教研究所（招待講演）
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 中村 聡
2. 発表標題 プロテスタント宣教師と東アジアの近代
3. 学会等名 慶應義塾経済学会コンファレンス下田セミナー（招待講演）
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	中村 聡 (NAKAMURA SATISHI) (80352722)	玉川大学・リベラルアーツ学部・教授 (32639)	
研究 分担者	馬 燕 (MA YAN) (80734300)	愛知文教大学・人文学部・准教授 (33931)	